

(12) 巡礼第7日 モンテ・ド・ゴソから  サンティアゴ・デ・コンポステラまで 4.4 キロ

10月26日(金)、モンテ・ド・ゴソの公設アルベルゲは寂しいくらいに空いていた。



10月27日(土) 巡礼第7日、最終日、6:00、一人早く目覚めて外に出てみると、冷たい星空の下にサンティアゴの街の灯りがきらめいていた。前回の巡礼時は32日間もかけて700キロを歩いて

来たというそれなりの感動と達成感をもっとあったように思う。が、今回は“今日で巡礼も終わりなのだ”という物足りなさとともに“もうこの道を歩くことはないだろう”という寂しさを感じる。

冷えた身体で部屋に戻ると、皆、足にたっぷりのオイルを塗り込んで最後の旅支度、何となく緊張感が伝わってくる。今日は12時のミサに間に合えばよい。バルでトーストと熱いカフェ・コン・レチェの朝食に十分な時間をかけた。

8:30、快晴。太陽が昇る前のうす暗い道を辿って昨日のモニュメントの丘とは別の丘に上った。丘の上には二人の巡礼者の大きな銅像が立ち、小さな月がサンティアゴ大聖堂の真上に残っていた。

2年前を思い出す。竹内がわざわざこの丘まで我々を出迎えに来てくれた。そして今日と同じように、この場所で銅像の真似をして右手を大聖堂の方に差し伸べて一緒に写真を撮った。その彼が、今日は“サンティアゴ・デ・コンポステラ”の霊名をいただいてここに立っている。



丘の上で最後の朝の祈りを石川が先唱し、それから丘を一挙に下った。市街地に入って自動車の往来が激しくなる。何処からともなく現れる巡礼者の姿、だんだん多くなった。横断歩道を渡ろうとしている右足義足の女性巡礼者に小野が付き添う、フランスのボルドーからピレネー山脈を越えて、たった一人で歩いてきたのだそうだ。旧市街入口のポルタ・ド・カミーニョを通して街中に入って

進む。目印になるはずの大聖堂の尖塔も、狭い石畳の道の両側を埋め尽くした家々の壁に隠れて全く見えなくなった。人出が多くなった土曜の朝、

迷路の中をキンタナ広場まで来ると、目の前に大聖堂の“聖なる門”

だがここは“ヤコブの年”＝ヤコブの祝日 7月 25 日が日曜日に

あたる年にしか開かない。大聖堂内部の造形を上から見ると

十字架の形になっているので、この門は十字架上部の頭の位置に

あることになる。左側へ回って十字架の足元にある“栄光の門”

の方へ進んで、大聖堂正面のオブラドイロ広場の中央に立った。

4人が輪になって“サンティアゴ・デ・コンポステラ”の霊名

を授かった竹内の先唱で巡礼締めくくりの感謝の祈り、「応援してくれた家族、友人、全ての関係者

に心から感謝します。これまで導いて下さった神に何よりも感謝……」「アーメン」



大聖堂の建造は 9-12 世紀の長期間にわたる積み重ねで造られてきたので、ロマネスク、ゴシック、ルネッサンス、バロック様式の混在だそうだが、何処がどれだか分らない。尖塔が高すぎるので広角レンズのカメラでないと全容を撮るのは無理。**(写真上)** 写真は後回しにしてとにかく巡礼事務所に向かう。受付で簡単な質問用紙に記入し届け出を済ませて、待望の“コンポステラーノ”巡礼証明書を受け取った。目的達成の瞬間、感激と安堵、互いに固い握手を交わす、「おめでとう!」、巡礼事務所の女性たちからも一斉に祝福の声、「おめでとう!」 (つづく)